6 音　楽　科

井坂　雅浩・真田美智子

1．個が生きる音楽科の授業づくり

(1) 個が生きる音楽科授業

一人一人の児童が，自分の持つ力を発揮しながら，互いにその音楽性を高めていくことをめざしている。そのことが，音楽科の目標である「豊かな情操を養う」ことにつながる。

(2) 個が生きる音楽科授業の条件

① 安心して，自己を表現できる人間関係

学級における音楽科の学習は，常に他（教師や友達）と関わり合う中で音楽活動していくという特性を持っている。自分の歌声や演奏を常に自分で評価したり，あるいは他人に評価されながら活動する。また，学級全体やグループで１つの表現をねり上げる活動も多い。そこでは協力，支持，容認が求められる。従って，自分の思いや感じ方を素直に表現できるような，安心感のある協力的な信頼感の持てる人間関係を形成する必要がある。

② 音楽科学習における学習者づくり

音を媒介とする音楽科学習においては，じっくり聴くという活動があってはじめて，個が認められ，個の多様性に気づくことができる。学習者づくりとして，声や音を注意深く聴く習慣や態度，能力を育てることが大切である。

③ 児童の実態把握

児童の音楽経験，音楽に対する関心，音楽の感じ方，表現技能には個人差がある。個が生きる授業づくりをするためには，個々の子供の音楽性の把握が不可欠である。これまでの音楽経験や表現技能は客観的にとらえやすいが，表面に表れにくい内面の感じ方や，個の中での変容にも注意を向ける必要がある。そのためには，観察法による座席表への記録，評価の記録等，できるだけ深く子供を理解する手だてを持たなければならない。

④ 音楽性を培うための教材の工夫

如何なる時代に置いても親しまれ愛されてきた名曲は，十分に児童の心を快くさせる力を持っている。教材化に当たっては，児童の発達段階や個人差を考慮し，一人一人の児童の音楽性を高め，培う工夫をしたい。また，音楽を再表現するばかりではなく，自分で音を探す・選ぶ・創るといった創造的な音楽活動も，子供の個性化・個別化の学習において一層重要視していく。

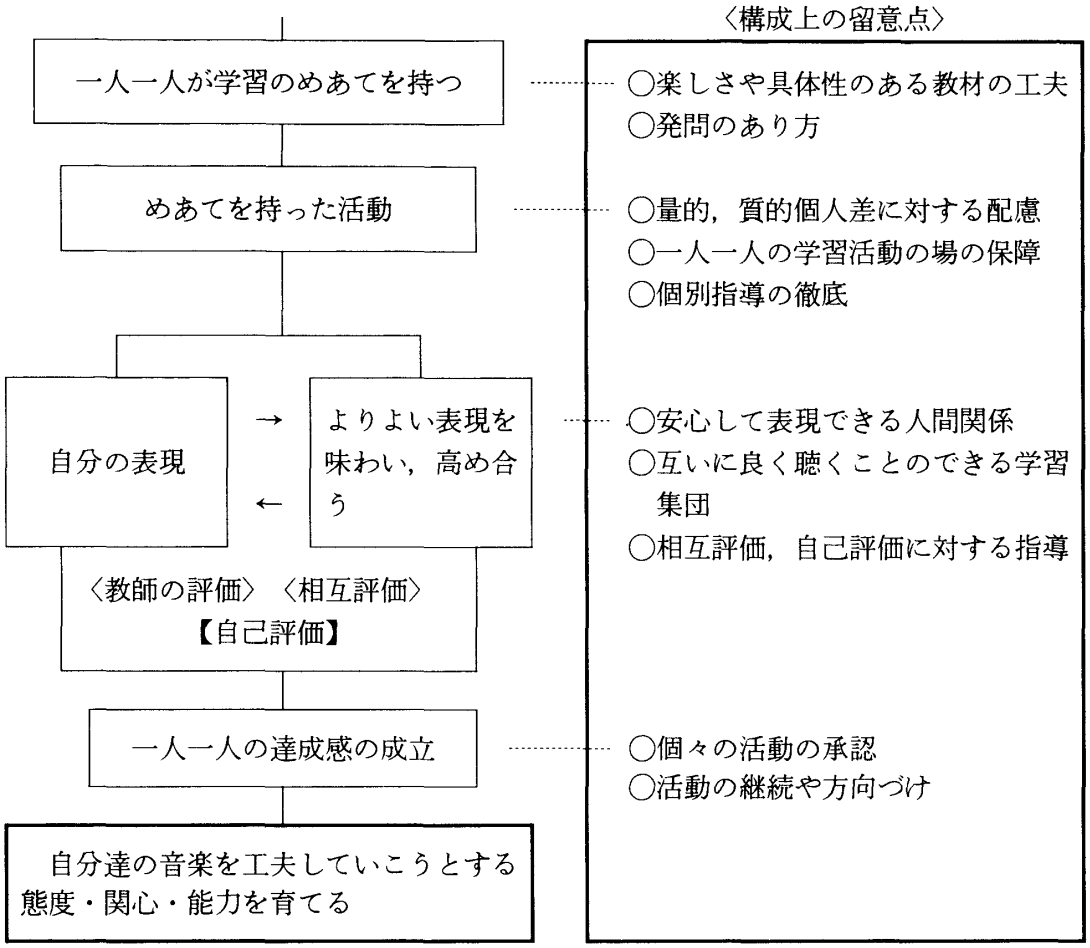
⑤ 達成感の持てる学習の場の構成

児童の達成感は，喜びや自信につながり，またやってみようという意欲も引き起こす。学習活動において，一人一人が達成感を持てる場の構成が必要である。音楽は，瞬時に消えていくものだけに，めあてを持った活動と刻々の評価活動が重要である。

2．個が生きる音楽科授業の構成

《基本的な考え方》

一人一人の児童が自分の持つ力を発揮しながら，互いにその音楽性をより高めていく学習



3．音楽性が高まる評価のあり方

(1) 評価の観点と内容の明確化

評価の観点	内容	児童の姿の例
①学習意欲や態度にかかわる評価	・教材に対する意欲が見られたか。 ・自分なりの活動のめあてが持てたか。	・やってみたいな。 ・楽しかった。 ・今度は，この曲で合奏してみたい。
②音楽的な感受性や表現の工夫にかかわる評価	・音楽の良さを感じ取って，表現活動をしているか。 ・よりよい音楽への工夫をしているか。	・こんな音が曲の感じにあっている。どの楽器がいいだろう。強さや速さを工夫してみよう。
③技能にかかわる評価	・自分の表現をするための技能が身についているか。	・「ソ」の音が鳴らせた。 ・リズムがそろわない。

(2) 自己評価のできる授業構成

・他の表現や考え，感じ方を聴く。

・自分の表現や考え，感じ方を振り返る。

(3) 児童の自己評価と教師の指導

・自己評価に対する指導

・児童に対する教師の評価